

## 駿河指物

「指物」とは、その意味に二つの説があります。一つには、物差し、尺がねなどを使い家具調度品を作るという説と、もう一つには柄（ほぞ）差しを主体とする木工技術を使って家具調度品を作るという説ですが、一般的に「指物」とは、これらの手加工技術と道具を駆使して各種木工調度品を製作することを言います。

日本の指物の発祥地は、平安時代の宮廷文化が花開いた京都と言われています。以来、全国から職人たちがこの技法を学ぶため各地から集まり、習得した技術を全国各地に広めてきました。

京指物が宮廷文化から始まったのに対し、江戸指物は、徳川幕府が江戸を中心に文化の発展を図ったことで始まりました。京指物が優雅な外観を重視するのに対して、江戸指物は、質素で表向きより内組み（細工をみせない）に凝るなど、堅固で粋な江戸気質を表現した製品でした。江戸指物には、書棚、文箱、文机、鏡台、衝立、座卓、硯箱、箆笥衣装盆、衣桁、脇息、針箱、軸箱、三味線箱、火鉢、屑箱などがあります。また、京指物には漆塗り（蒔絵入り）の物が多いのに対して、江戸指物には生地を生かした漆塗りの物が多く、木材の持つ材質、木肌の感触、自然な杳理の美しさを表面に出した製品が特徴とされています。

駿河指物は、徳川時代の久能山東照宮、浅間神社の造営などにより、それに携わった優秀な職人が静岡に移り住んだことにより起こったとされています。

杳理を生かした各種の加工技術を得意とし、塗りは材質感が残る木地呂塗で仕上げるなどの特徴から、駿河の指物は、京指物よりは江戸指物の流れを強く残していますが、製作工程では、全国的な家具産地ということもあり、機械を上手に使いこなせる点が他産地との大きな違いとなっています。

駿河指物が全盛を誇ったのは、明治末から大正初期の頃で、静岡の木漆産業全体が黄金時代を迎えた時期と重なり、海外に盛んに輸出された木漆器の素地として大いに製造されました。

現在その技術は、茶道具、文庫、小引出、硯箱等の小物指物を主に手掛けている「木工指物師」と、大きな製品、茶棚、箆笥、座卓を主に手掛けている「家具指物師」に引き継がれています。

指物家具と一般の家具との大きな違いは、木材の部材の加工法で、一般家具は、そのほとんどの接合をフラッシュ（杳組み）構造のダボ構造で行うのに対し、指物家具は、無垢材を多彩な組み手、継ぎ手技法を用いて製品を作るため、一つの部材に多くの工程を費やすことで大量生産には向かず、高級品となっています。

なお、木工指物師の中で、「静岡木工芸組合」の組合員が作る指物を総称して「駿河指物」と呼んでいます。